

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十一年三月十五日發行(毎月一回・十五日發行)

(通第八十四号)

目

聖徳太子と親鸞聖人……………花田正夫…(1)

近角先生の御一生を追憶して……………福島政雄…(4)

次

仏教生活の告白……………自在丸 新十郎…(9)

——信心の讚歎——

慈光

第八卷

第三號

聖徳太子と親鸞聖人

花田正夫

私が太子の御精神を心から仰ぎ始める機縁はひとへに親鸞聖人のお導きによります。若し聖人がましまさなかつたら、只偉人、賢者としての太子は仰ぎ得ても、私の生命にひたたくと濺がれる太子の心光と言ふものは、感得出来なかつたと思ひます。

聖人が太子を、久遠の父母、觀音の示現、日本の教主世尊として、心をつくし、言葉を極めて、随喜渴仰せられる御姿に、私の心もひらかれて、御指南のままに、その慈光を拝し奉る身にさせて頂いたのであります。

さて聖人と太子との御心のむすびは、聖人の十九歳の時の磯長の太子の御廟への参籠に始り、廿九歳の六角堂の救世觀音菩薩の百日の祈願に及び、更に法然門下の人となられての念仏生活は、肉食妻帯の非僧非俗の宗風をひらかれ

太子奉讃、等々、聖人が朝に夕に、太子を憶ひ太子を念じ給うた自然の御足跡であります。

歎異抄に拝する太子の心

歎異抄は聖人の御晩年の法語を、常隨の弟子の方が誌されたものであります。そこに聖人の御生命の中に渾然と融けた太子の御心が拝見されるのは理の当然と申さねばなりません。

斯う申せばすでに、嗚呼あそこにと想ひ浮べられる読者の方もありませんが、例の有名な総結文にあります。

『……………まことに如来の御恩といふことをば沙汰なくして、我も人も善悪といふことをのみ申しあへり。聖人の仰には「善悪の二つ総じてても存知せざるなり。その故は如来の御心に善しと思召すほどに知り徹したらばこそ善きを知りたるにてもあらめ、如来の悪しと思召す程に知り徹したらばこそ悪しさを知りたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのことみなもてそらごととたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします」とこそ仰は候ひしか。……………』

この中に、太子憲法の第十条と、太子の御持言が、その

る根源を太子の在家仏教から得られて居ります。斯くて九十歳の念仏の息絶え終られる日までの聖人の生涯は、縦糸を太子に仰ぎ、横糸を法然上人から得られたのであります。御晩年の和讃に

弥陀・觀音・大勢至

大願の船に乗じてぞ

有情をよぼうてのせ給ふ

とありますのも、聖徳太子と法然聖人を觀音と勢至の示現と仰がれて、弥陀の本願に帰し給ふ聖人の、渴仰隨喜の真情の表白であります。

この聖人がいよく御晩年に及び、太子を追慕讃仰遊される模様は、他の祖師方に見ることの出来ない深き広き篤さを拝するのであります。聖人八十三歳の太子の七十五首和讃、次に八十五歳の百十五首、更ほ八十六歳の十一首の

まま浮び出てをります。

先づ第十条は

『このころのいかりを絶ち、おもてのいかりを棄て、人の違ふを怒らざれ。人皆心あり、心各執れることあり、彼れは是みすれば則ち我れは非みす、我れ是みすれば則ち彼れは非みす。我れ必ずしも聖に非ず、彼れ必ずしも愚に非ず、共に是れ凡夫のみ。是みし非みするの理なんぞ能く定むべけんや。相共に賢く愚かなること鑽のはし無きが如し。是を以て、彼人は瞋ると雖も還つて我が失を恐る、我れひとり得たりと雖も、衆に従ひて同じく拳へ』

私共が、是非善悪の相対界にあつて、我他彼此の争ひを無限に續けて居りますけれども、これらは皆、独善と無定見、対立と妥協の渦巻き、そらごと、たわごとの域から一歩も出られない身と知らされます。そこに始めて凡夫われの姿が照し出されるのであります。

次に、橘女王によつて聞きとられた太子の御家庭生活における御持言は、

『世間は虚仮なり、唯仏のみこれまことなり』

であります。そらごととたわごとまことあることなき凡夫われを、飽までも融かし和けて、真なるもの実なるものに転化して下さる絶対のまことが、仏の大悲ひとつである、とのことであります。即ち虚仮の身と離れ給はぬまこと、

恰も、火が炭について、やがて黒い炭が赤い火と転ずる如く、広大無辺の仏のまことに転じ融かして下さる、その忝さを、御家庭生活において、随時、随所に讀へられてそれが御持言となつたものであります。

更にこの十条と御持言の淵源に、維摩經の空觀、小乗から大乘への転入の妙趣と、勝鬘經の第八位の菩薩の上にあるはれる『自分は一介の凡夫である』との自照と、衆流に冥合して更に異趣なき信管と、法華經の眞善同歸の法味が、渾然と一体にとけて、醍醐味を頂くのであります。

ここまで参りますと、世尊が太子か、太子が世尊か。そしてまた、聖人が太子か、太子が聖人か、二にして一、一にして二、むべ私如き愚鈍の者が太子の心光の片鱗にも触れ得ましたことも、この聖人ましませばこそでありました。ここに聖人の仰を誦しまつりつつ太子に参じ、同時に世尊の慈懷に歸入せしめられるのであります。そしてその総べが『ただ念仏のみぞまことにしておはします』におさまるのであります。

二月二十二日の太子の御忌にあたり、私の胸に去来してやまぬ奉讃の一端を誌し、巻頭言といたしました。

近角常觀先生の御一生を追憶して

福島政雄

二、外遊御帰朝まで

お友達

朋友といふことについては先生は実に深い感銘を持つておいでになりましたが、實際先生は優れたよいお友達を持つておいでになりました。信仰の上の莫逆のお友達ともいふべき池山栄吉先生のことには後に申し述べることになりませうが、東京帝国大学哲学科三年時代からの同窓のお友達としては、下村宏、吉田静致、常盤大常、境野黄洋、杉村楚人冠などの方々がありました。何れもそれ／＼の方面において精神的に大に活躍なされた方々であります。

修身教授

帝国大学卒業後、先生は真宗大学で英語と修身とを教へられました。当時修身は将来の信仰問題の基礎になるからと云つて原稿を作つて大切に教へられたといふことでもあります。それは御令弟から承つたことでもあります。此の一事も先生の真面目をよくあらはしてゐると思ふのであります。

蓮如上人御詠

後の世のしるしのためにかきおきし 法のことはかたみともなれ。

われなくば誰もこころをひとつにて 南無阿弥陀仏とたのめみな人。

なきあとにわれをわすれぬひとあらば 唯弥陀たのむこころおこせよ。

形見には六字の御名をとどめおく なからん世にはたれももちひよ。

極樂へわれゆくなりときくならば いそぎて弥陀をたのめみなひと。

辭世

我死せばいかなるひともみなともに 雜行すてて弥陀をたのめよ。

やそちいつつ定業きはまる我身かな、明応八年往生こそすれ。

す。信仰は道徳問題に行きつまつて開けるといふ先生の体験から出た御事であります。

巢鴨刑務所

それから巢鴨の刑務所に教誨に行かれるようになってからの事とおもはれますが、刑務所長がキリスト教を以て教誨しようとした時に先生は断呼としてそれを反対せられ、仏教による教誨を以て徹底せられました。これは先生の信念の確たることを物語るものであります。これは先生の信他力教、すなはち浄土教でなければ徹底的救済といふことは到底出来ないといふ大信念の下に行はれたことでもあります。実に先生は刑務所の受刑者に対して深い同情を持たれたばかりでなく、満天下の同胞が仏陀の救済を離れて生活してゐる有様を心から氣の毒に思はれ、御著「信仰の余瀝」の中において次のやうことを述べておいでになります。

『巢鴨三千の囚徒が法縁を断たれたと聞かれた時は、苟も信仰の経験ある人はそゞろに心を動かされたるなら

む、況して現今満天下の同朋は、信仰における監獄に監禁せられて、三至の慈悲に離れてゐるのを見て、同情の涙をそ、がずには居られまい。一日も早く我が同朋を光明ある世界に救ひ出さねばならぬ。』

宗教法案

明治三十二年から三十三年にかけて宗教法案問題が起りました時、句仏師を中心として近角常観先生、池山栄吉先生の御二人が大活躍をなされ、遂に法案の徹面に成功せられました。それは非常に重大なことでありまして、仏教の地歩を自由の空気の中において確実に保つ上には是非必要なことでありました。

西洋留学

此の法案問題成功の功によつて近角、池山両先生は東本願寺から西洋に留学を命ぜられ、句仏師も渡欧なされました。明治三十三年四月のことです。四月十三日に横浜を出発なされ、二十五日バンクーバー着、三十日の早朝シカゴに着なされました。この間太平洋の鯨波、ロッキーマ山の積雪、茫々たる曠原など、天然の大觀を送迎なされて、急にアメリカの二十層の家屋が並び立つてゐる街頭に立たれたのであります。それから池山先生と御一緒に視察をはじめられました。

アメリカ視察

シカゴからニューヨークに赴かれ、ニューヨークを中心

として南北二回の旅行をせられ、その間或は梵語の教授に面談せられ、或は仏教信者を訪れ、キリスト教会とその信仰の有様を審かに視察せられました。またキリスト教の社会事業をも視察せられました。そしてアメリカのキリスト教は社会的であると感ぜられました。

『教会を以て単に日曜日における礼拝の場所と定めずして、その周囲には青年の寄宿舎、労働者の集会所、その他諸種の俱樂部を以て満たされ、日曜日に限らず、週日にもしばしば、教会に於いて集會をなし社会の改良及び窮民の保護をなし、又日曜日に教会に集會するについても、眞面目なる信仰といふよりも、社会的にこの場所によつて一種高尚なる樂を得るといふ傾向なり。』と述べて居られます。

アメリカでは両先生共同の視察をなされましたが、ヨーロッパの視察は分担して視察しようといふことに御相談がまとまり、池山先生は直にドイツに行かれてベルリン大学に入つて学問の方の研究をなされることになり、近角先生は先づ英国を視察し、夏に両先生はフランスで相會なさるといふことになりました。それで池山先生は五月十八日ドイツのブレイメンに向はれ、近角先生は同二十三日アメリカを辭して英国のリバプールに向はれました。

英国にて

近角先生は五月三十一日ロンドンに御着になりました。「旧友吉田静致君と同宿す」と書いて居られます。ロンド

ン御滞留凡そ二ヶ月、居然として城のやうな英国教会の制度に驚き、百般の教派が皆備つてゐて、千宗万派雜然としてゐるロンドンにおいて、一々その教会を訪れ、出来る限りその性質組織を研究せられました。宗教的問題は常に火花を散して戦つてゐると云つておいてになります。しかも英国監督教は苟くもアングロ・サクソン勢力のあらん限り、千古變ることがないであらうと感想を書いて居られます。なほロンドン御滞在中、北の方ヨーク、南の方カンタベリーにも遊ばれ、その伽藍を訪はれました。またイートン、ハーローの学校、ケンブリッジ、オックスフォードなどの大学を訪ねられました。

オックスフォードにマックスミユラー博士を訪はれましたのは七月六日であつたといふことであります。博士は有名な東方聖典 (Sacred Books of the East) の翻訳者でありまして、先生と会談一時間、懇ろに日本仏教に新鮮な光明を与へるやうにと誨へられたといふことであります。しかもその十月下旬、博士は七十七才で世を去られたので、先生は無限の感懐を寄せておいてになります。

フランスと旧教

七月二十五日、「吉田君と共にドーバーより海峡を渡り、仏国カレーに向ふ」と書いて居られますが、先生のフランスの旧友に対する御感想は特に注目すべきものがあります。パリでは七月三十日から一週間、仏国聯合公私教

恤會議に出席なされ、九月三日から一週間、万国聯合宗教歴史大会に出席せられました。フランスの旧教については僧または尼の組合、すなはちオルデンといふものが旧教伝導の精兵であることに注意せられ、猛烈な手段を以て教育の拡張に勉めつゝあると云れ、ゼシユイット、ドミニカン、フランシスカンの各派が盛んに社会事業に活躍し、国家社会上には危険な要素であるにも拘らず、その勢力は益々盛んである有様を視察せられて、旧教が政治的關係を有して、ローマ法王の下に世界的権力を主張してゐることに對し、心を寒くして日本の仏教者の為に忠告しておいてになります。此のフランスにおける先生の深い御感懐が今後における先生のカトリックに対する御態度を決定するやうになつたものと思はれます。政治と宗教との結託が如何に害毒を及ぼすものであるかを痛感なされてゐるのであります。

南独旅行

パリでは池山先生と会せられ、九月十八日から御同道で南独旅行の途に上られました。ドイツ聯邦には新教國があり、旧教國がありますのでストラスブルヒでは旧教徒が多いけれども、新旧両教互に相争ふ有様を視察せられ、ウエルテンベルヒでは最も盛んな新教國として日曜日の会堂殆んど空席のない有様を見て、そ、ろに宗教改革の當時を追想なされてゐます。一週間の伝導會議にも列席せられ、様

々の社会的施設をも見学せられました。次にミュンヘンでは旧教の方面の施設、殊にその教育感化の巧みなことに感ぜられてゐます。

澳 国 へ

それからオーストリアとハンガリーとの御視察では、オーストリアに秋風落日の感を催され、ハンガリーではその反対に民族の勃興を感じておいでになります。ハンガリーはヨーロッパにおける唯一の東洋人種の国であることに深い感慨を寄せられてゐますが、それにつけても日本国民が奮発して文化を進めることを切に希望なされてゐます。

ベルリンにて

明治三十三年十二月二日にはベルリンから日本国の御両親様にお手紙を書いて居られますが、日本国をおもひ殊に御両親をはるかにおもはせられる心情が溢れ出てゐます。「母上の御料理江州の菜漬など大に想ひ出され候」と書かれて、日本食をしきりに恋しがつておいでになります。三十四年の四月八日にはベルリンにおいて祝尊降誕会の花祭をはじめて行はれてゐます。それは最初に池山先生、吉田、姉崎、巖谷の諸氏と御相談遊されて行はれたさうであります。当日は多くのドイツ人、来会し長岡外史氏の挨拶をプロスト氏といふのが独訳し、次いで姉崎正治氏は花祭の歴史についてドイツ語で講演せられ、巖谷季雄氏もドイツ語で自作の詩的お伽噺を詠まれたといふことで、此

の花祭はドイツ人に非常に善い印象を与へたといふことであります。なほ藤代氏も流暢なドイツ語で講演を行はれてゐます。而して先生は此の花祭のことを四月十五日にオランダのアムステルダムで書かれた手紙で長岡氏に報道しておいでになります。

また 英國 へ

その五月には先生は再び英國に遊ばれ、詩人ミルトンの隠れ家を訪はれ、クエーカー教徒ウィリアム・ペンの会堂を訪ひ、英國の新教への感慨を寄せ、その真摯、敬虔、実行のたゞであつて熱誠火の如く堅実石の如き点に深く感じておいでになります。英國の国立教会は他の宗派のはたらきに刺激せられてその血液を清浄ならしめられてゐると見ておいでになります。

ドイツにて

此の他、先生はドイツにおいては既に三十三年の秋にマルチン・ルーテルの遺跡を訪れてその宗教改革に深い感慨を寄せ、なほゲーテ、シラー、フランケなどの遺跡をもまはられ、チューリッゲン等の秋の景色をも眺めておいでになります。

感慨 無量

かやうにして先生は殆んど二年の星霜を西洋において御過しになりましたが、明治三十五年二月四日、本山からの電報を受けて御帰朝なされることになりました。その時の

ことを先生は次のやうに書いておいでになります。

『西歴一千九百二年二月四日早晩四時夢寢む。突然として父母の慈訓を回憶し、翻て一昨春已降西遊の経過を追懐し感慨止むべからざるものあり。乃ち盛歎語みて大経を拜誦す。且つ以為、此の如き深遠微妙の念を起したることなし。今にして筆を執りて其感を描かざんば亦何の時か其期(な)らんと。而して時正に登校時間に迫る。乃ち校に登りて帰らぬ朝を促す電報に接す。回顧せば米、英、仏、獨、澳、匈、和蘭、白耳義、諸国の諸教を視察して、人事忽々の間二星霜を経たり。今や思想円熟して益佳境に入るの時、此報に接す。因縁洵に不可思議也。西遊二歳今都伯林を去りて、羅馬の旧都を一瞥し將に東帰の途に上らんとするの昨夜(二月十一日夜)、諸親友子を助けて行装を整へ帰りし後、孤灯影下俯仰感慨に堪えず、座側小照をとりて感を記し教友諸兄に呈す。』

獨乙帝國伯林市に於て 『近角常觀』

二ヶ年の追想

西洋の御生活殆んど二ヶ年、その間に先生は西洋の社会とキリスト教会の諸施設を御覧になつて、その社会的活動の盛んなことに感ぜられたのであります。それと相伴つて仏典殊に大無量寿経を非常の感激を以て御読みかへし遊され、生きた宗教としての仏典の味はひを深く感じておいでになります。先生が御敬父に対する至孝の御心持はその

御一生を一貫してゐるのであります。西洋の御生活の最初においても終り方においても、御敬父の親心に対して何とも云へぬ感慨を持つておいでになりました。

『親の言はれたる通り、かく萬里海外に居ることになつてあるかと考へたら、親の慈悲やら、仏の御恵みやら胸が塞がつて感涙に咽び、とても横臥してゐる訳にゆかず、早速床より出でて、口を嗽ぎ、顔を洗ひ、満身の感謝を以て大経を誦誦し初めた。』

これが先生の至心の御言葉であります。

一方において池山先生との御友情も終始一貫して誠に御美しきものがありました。明治三十四年十月三日御二人でイエナの宿で御書きになつた御手紙には次のやうなことが書かれてあります。

『拜啓、此度淨様エーナに御留学に就き同行致し、当宿に泊し申候。是ルーテルがケツスラー、ロイチナー二人に遇ひたる宿に候。其室にて朝の珈琲を飲みつ、』

ツム・シユワルツェン・ペーレンにて 常觀

ビスマルクもここに泊したること有之候 榮吉』

御二人の先生はかやうに西洋の生活を共にせられ、やがて御帰朝になつてそれぞれの方面に御活躍になつたのであります。唯お念仏一つといふ点において永遠にひびき合つておいでになるのであります。

佛 教 生 活 の 告 白

信 心 の 讀 歌

自 在 丸 新 十 郎

仏教は私達の心を大變広々とした、すきつとしたものにしてくれるものである。それは私という謂はば小さな塊がなくなつて、宇宙全体というものが、心の中にひらけてきたやうに実感されるからである。否、私も宇宙もないやうな大きな世界が展開されて来たからである。宇宙のすべてのものが——それは眼前に眺めらるる山や川や草木や、人間や動物や家屋や家具、その他一切、否、太陽や月や星までが——すっかり消えてなくなつて、眼に映らなくなつたという意味ではなくて、総てのものはありのままの姿で眼に映りながら私の心をとらへないのである。私の心がそれらの姿や動きによつて少しも擾乱されないのである。私の心の鏡には宇宙のすべてのものがその影を写すが、映つただけで、それがどうともならないのである。直感されたまま思惟にはならないのである。否、時には影すら写さず、直感さへも与えない場合が屢々である。

の世界が展開されたのであつた。

信心生活は、俗世間での生活を営みながら、こんなすがすがしい気分の中に、いつも私達を過ぎして下さるのである。何とも分らぬことをよく——思索したり、つまらぬことを喜び哀しんでみたりしてゐる自分が、宇宙大自然の中にとかされて無くなつてしまつたといふか、また気宇の大きな方面を積極的に云い表はしてみるならば、宇宙大自然が自分の中にとけこんでしまつたといふか、兎に角、自分とか、宇宙大自然とかいふものが、全くなくなつた世界が展開されるのである。

仏教では私達のことは小我といい、宇宙大自然のことは大我とよばれてゐる。小我とか大我とかいふと、いかにもさやうな小さな自己とか、宇宙のやうな大きな大我が相對的にあるかに考へられ易いが、小我に対する大我では、本當の意味での大我とはいへまい。小我たとか大我たとか、そんな區別は無くなつて、小我も大我も一つにとけあつた世界であつて、始めて大我ではあるまいか。否、小我も大我も認められない、従つてまた、何ともいひ表はしやうのない、考へやうのない、否、いふものもいはれるものもなくなり、考へるものも考へられるものもなくなつた言語道断、亡言絶慮の状態を、かりに言葉に表はして大我といつたに過ぎないのであらうか。大我といふと、そんなものがあるかに考へ易いが、そんなものではあるまい。私は信心

物事を夢中になつて考えながら道を歩くと、物が目にはいらないうで、自転車に打当つたり、電柱に衝突したりすることがままあるが、それに似通つたことが信心生活にも経験するのである。然し信心生活はそれとは多少趣が違つて、無意識や無感覚のうちにも、意識や感覚は働いてゐるのである。

私達は青年時代、浩然の氣を大いに養ふべきだとよく論されたものであつた。それで広々とした原野や海岸に立つて、広い原野や海原を眺めたり、高い山頂をきはめて遠く下界を見渡したりしたものであつたが、そんな際は、心の中のものもやした塊は何処かへ去つて、何とも云えぬすがすがしい気分になつて浸ることができた。世俗的な榮達や出身も、かなしみも楽しみも、憂いもよろこびも、善も悪もすべてが忘却された境地である。大自然のふところを抱かされて、自分という取るに足らぬ小さな存在が滅却された心

の世界が正しく大我の世界であると思ふ。

また仏教では一如法界とか一法界などといふ言葉が使はれてゐるが、そんなにいはいはれてみると、何だかそんな世界が何処にもあるやに受けとられ易いが、そんな世界が何処にもあるわけではない。謂はば何もない境地が一如法界であり、また信心の世界がよくこれを表はしてゐるともいひ得ようか。というのは、信心生活には欲びも哀しみもなければ、安心も不安心もないからである。世の中の色々な事件や、宇宙自然の色々な姿や現象が、このやうな信心といふ透明な心の鏡に写つては来るが、それらによつて心の鏡は混乱されるといふことはない。そしてそれらは静かに静かに鏡の面を滑り動いてゆくだけだからである。

信心の鏡は丁度映画に於ける銀幕みたやうなもので、自然界の色々な姿や、色々な事件、または人間社会の種々雑多な葛藤は、この銀幕にありのままの様相を写しはするが、銀幕自身はそれによつて影響されることは少しもないのである。これを眺めて嬉しく思つたり、哀しんでみたり、怒つたり笑つたりするのは、人間社会の普通の出来事である。ここでは最早人間の心が働いてゐるのである。邪念が加はつてゐるのである。信心の鏡はあくまでも透明で、銀幕の如く、人間社会のありのままの姿を写すだけである。緑の松は緑の松として、赤い花は赤い花として、無心の心に映るだけである。それが美しいとか、醜な色だと

か、欲しいとか欲しくないとか思ふのは、信心とは別な人間心の働きで、凡心の仕わざである。こんな意味に於て、仏教を信じた信心生活には、誠にすつきりした、透明な、世の中の事件をありのままの姿に映写する、丁度銀幕のやうな心の鏡が開けて来るのである。經文にはこれを信慧と説き、親鸞聖人は信心の智慧とも智慧の念仏とも称せられた。

仏教は觀無量壽經にあるやうに、私たちの苦惱を除いてくれるものである。苦惱にも大きな苦惱もあれば小さな苦惱もある。一度に強く襲いかかってくる苦惱もあれば、弱いが長い間続いてやつてくる苦惱もある。私の経験では、弱い小さな苦惱などは殆ど感じなくなつたのである。誠に鈍感になつたものである。大きな強い苦惱と雖も、ひどく濁つた水溜りが、底から自然にわき出る清水によつていつしか濁りがとれて透き通つてくるやうに、自然に、いつてもそんなに長い期間は要しないが、努力は少しもしないのに消え去つてしまふやうである。従つて信心生活以前のやうに、対人關係に於て、人様からどんな目にはあはされようとも、憤りを長く持ちこたへるといふことが出来なくなつたやうである。この点まことに意氣地なしになつてしまつたものだとよく／＼反省されるが、実以つて根強い復讐といふことが全くできなくなつたのである。誠に損な馬鹿な人間になつたものだと思ふことが屢々である。でも、こ

親鸞聖人は、信心または安心を、大慶喜心と仰せられた。大慶喜心は普通、物に囚はれて喜んだり、哀しんだりするやうな心ではなく、悲喜哀樂を超越した、これらを感じなくされた大きな喜びである。また安心は不安苦惱を伴はぬは勿論、小安心すらもたない大きな安心である。小安心や小慶喜心は、必ずしも仏教によらなくとも、私たちが日常生活に経験できることである。俗に幸福に暮して居られる人々は、このような余裕ある時間を沢山もつて居られるに違ひない。然しこれは大安心とか大慶喜心とか呼ばれるものでない。いつどんなことで、大きな不安や苦惱が襲つて来ないとも保し難い安心であり喜びであるから動搖常なきものである。大安心や大慶喜心には動搖は起らないのである。

以上は私が体験してある仏教生活の内容を、私の脳裏に浮んだ事柄をありのままに並べて述べたに過ぎないが、信仰生活の利益は『南無阿彌陀仏をととなふれば、この世の利益きはもなし』と、祖聖も仰せのやうに、実は無限であつて筆舌のよくする所ではない。聖人はまた、至徳具足とも、至徳成満とも仰せられた。人生上のすべての功德が、六字の名号におさめられてゐるからである。そこでこの名号が、信心または念仏、または禮拜となつて私達の生活の上に具体的に現はれてくると、身は娑婆世界に在りなが

れが私にとつては却つて有難くもあり、また感謝のもとにもなつてゐるやうである。

一体信心といふのは言ふ迄もなく、如来を信ずることである。如来を信ずれば、如来の威神力が働いて、この小さな私の我といふものをとり去つて、所謂無我にして下さるのである。ああだ、かうだと思惟し判断し批判してゐる自我が消滅されるのだから、今まで自我によつて惹き起されてゐた色々な苦惱がなくなつてくるのは、当然なことである。結局信心の生活に於ては根性がなくなつてしまふのである。河の水草でも、河底に根をはつたものは表面のよこれは清らかな水で、いくらでも洗ひ流されるが、それは表面だけで、水草は依然として河に残つてゐる。これに反して、底に根をもたない浮草は、流れによつて洗い流され、河は本當に綺麗にされるのである。人間の心は、修養や努力によつて、いかほど怒をおさえ、平氣をよそひ、苦悶にたえてみても、そんな心を惹き起した根本が何処かに残つてゐる間は、これを根本からたやすといふことは困難である。自我を断たうと努力してゐるものは自我だからである。自我の否定がいに困難であるかがわかる。

こんなわけで、如来から賜はる信心といふ如来の威神力と徳の力によつて、自我をなくして貰ふのが最も得策といふことになる。自我がなくなつて始めて大きな安心が得られる。これは何ものにもかへ難い大きな喜びであるから、

ら、心は極樂世界に安住してゐるという自覚が生ぜしめられるのである。然も信心(念仏)生活は、如来の名号を聞いた一念から断続されないで、たえず行者の生活となつてゐて下さるのである。頭を下げて阿彌陀如来を拜んでゐる時だけではない。頭を下げてゐようとゐまいと、名号を口に称へてゐようとゐまいと、寝てゐようと醒めてゐようと、悪事を働いてゐようと、善事を行つてゐようと、そんなことには一切係りなく、一日四六時中が信心の生活である、念仏の生活である。

安心決定鈔に、常念仏という言葉がでてゐるが、誠に有難い言葉である。聖人は曇鸞大師にならつて、信心のすがたとして、淨心と決定心のほかに相續心をあげられた、いはゆる三心である。相續心は余念で断続されないから相續心といふことであつて、如来を信じた瞬間から一生の間、否、永遠無窮まで、念仏生活は相續されるからである。念仏生活は無私の生活であり、また三昧の生活でもあり、また寂滅の生活でもある。一切すべてが一つに融合された精神的、一如界の生活だと解釈されないであらうか。

私は他力信心は世諦因縁法の範圍だけに止まるべきではなくして、実相第一義諦といふところまで徹底せねばいかぬとふうことを従来強辯して来たが、それはここまで来なければ真理にかなはず、金剛堅固の信心でなくなり、寂滅を樂と為すと仰せられた、寂滅三昧の妙境が味はえず、そ

してまた親鸞聖人を通じて七高祖や釈尊の信心（自覚）に通ふことが出来ないと思はれるからである。

聖人は信心には必ずこの世で十種の利益があると強調されたが、その最後に入正定聚の利益をあげられた。正定聚の中に加へて頂く利益である。ところが正定聚は極樂世界の人々である。私たちが如来を信すれば、即刻極樂世界の任人の仲間入りが出来たことを表現された言葉である。聖人自身は、自分の体はまだこの世にあるけれども、心だけは淨土に遊んでゐると仰せられた。これはいはば信心生活の告白であるが、こんなことは敢て聖人一人に限つたわけではなく、阿弥陀如来を経文通りに如実に信じて、如来から信心が与えられた方々は、誰でも当然に、否、必然に体験させられる境地である。

このやうな境地は、一面からみれば、この世界とは全くかけ離れた世界であり、自我を以て生活してゐるだけでは到底窺ひ得ない境地でないとか、過去の経験から推察される次第である。仏教では出世間とか、超世とか、解脱とか、無分別などの言葉で、この世を全く違つてゐるといふ意味を色々な方面から云ひ現はしてゐる。一体私たちの苦悩や生死や、その他すべての矛盾の問題は、どんなにしても、相対的きこの世では、根本的に解決できない問題である。それ故この問題を是非解決したいといふことになれば、どうしてもこの世以外の世界に於て、解決して貰ふ外

にはならない。元來争ひの主体である自我といふ根性が如来によつてなくなされてゐるからである。五分五分根性で争いながら、争ふ根性がないとは正に矛盾のようだが、無我を以て争ふ故、真実の争いにならぬは当然といえば当然なことではあるまいか。

信心生活は無我の生活であるが、無我についても亦同じことがいへる。無我だから、無意識、無觀念で何も考へないかといふと、さうではない。実人生に於ては普通と少しも変りなく、思議し判断し、或は感情を以て相対するのである。苦悩にしても同じであつて、苦悩がなくなつたかといふとさうではない。思うやうに行かねば苦悩もあり不平も出る。これは人間生活に於いた人間性の属性で、どうにもならぬことである。だが仏教生活はこんな人間生活と表裏一体の生活であるから、一面、苦悩に沈んだ生活を送りながら、他の半面には苦悩を除いてくれる。否、苦悩など少しも感じない信心生活が恵まれてゐるのである。人間生活は人智で分別しながら自我を中心とした生活であるが、信心生活は仏智不思議の生活であるから、分別されない生活である。分別されない無分別の生活故、すべての苦悩も、恩讐も分別されなのまま、真の苦樂や、真の恩讐とはならないのである。信心生活を讃仰し、仏恩の鴻大なるを深く感謝する次第である。

完

に方法はない。かやうにして私たちに要請された世界が極樂世界である。

私は先に仏教を信じたからとて、全く違つた人間になつたわけでもなく、ありきたりのありのままのつまらぬ人間であることを強く主張しておいた。私は悪いことはやめ度いと思へどもやめることも出来ず、善いことはせねばならぬと思へども善いことは少しも出来ない不甲斐なき人間である。こんな人間が、信心生活に於て上に記したやうな極く安樂な生活を送らせて頂くといふと、前と全く矛盾すればせぬやと疑問を持たれる方があるかも知れない。確かにこれは大きな矛盾幢着である。ところがこの矛盾幢着が、実は矛盾幢着しないで調和される所に有難い仏教生活の特徴があり、また仏教生活が真理に適つた真理通りの生活であると強く主張される所以である。

私の人生生活を顧みると、正に五分五分の生活である。先方が五で出てくれば、こちら五ではねかへず。否、こちらが五分五分根性を出すから、先方も五分五分根性を出してくる。正に五分五分の争ひである。総ての暗闘や軋轢はこんな所から生れてゐるやうである。ところが先方はどうだか知らないが、こちらは五分五分根性で対しながらもこれに即して信心生活がある。五分五分根性で鎗を削つて争つてはゐるけれども、少くとも当方だけは真底から争ひ

長州お輕の歌

きいてみなんせまことの道を無理の教じやないわいな
真きくのがお前はいやか何がのぞみであるぞいな
自力励んでまことは聞かで現世いのりに身をやつす
思案めされや命のうちにいのち終ればあと思案
領解すんだるその上からは外の思案はないわいな
只で往かる身を持ちながらおのが分別いろくんに
己が分別さつぱりやめて弥陀の思案にまかさんせ
わしがこころは荒木の松よ、つやのないのを御目当よ
作日きくのも今日またきくも是非にこいとの御よび声
おも荷背負うて山坂すれば御恩おもへば苦にならず
高い山からお寺をみれば、御恩たふとや宝山
宝山には足手をはこぶ、むなし帰りをせぬがよい
まこと真実おやさまなれば何の遠慮があるかないな
おもうてみなんせ喜ぶまいか、丸のはだかを任立どり
どんざきるとも御いはれ聞けば絹や小袖をきたこころ
狂人婆といはれし私も、やがて淨土の花嫁に

編集後記

『暑い寒いも彼岸まで』の彼岸が近づいて参りました。本年はことに雪が深かつたと報ぜられる北国の草木もたくましい芽萌えが想像せられます。

二月の末日市内の書店から、故菅瀨芳英師の語録を求めて拝読して居ります。師を中心とされた同和会員の現存の方々に、岡山市の千輪清海師、名古屋市の三上孝基氏、松山市の岡寛一郎氏、岡山県の西本清三氏の四人の方々が慈光誌に深い御縁を頂いてゐることにひつくりいたして居りましたところ、そこへ不思議にも次の西本様の御法僧が舞ひ込み肅然といたしました。『……二月号の『汝若し……』の標題が眼に入るなり胸が躍りました。私は幼少の頃から仏縁が篤かつたのでせう、青年期には熱心に聞法いたしました。が獲信の域に達せぬまま、三十年の歳月を夢の如く経りました。数年前、自分はまだ六十になるが、往生一定の確信はないではないか、これではないか、駈足を法を求めねばならぬと勉めて仏典を読んで居ました。或時観經の『汝若し念ずること能はずんば応に無量仏を称ふべし』の文に接し、ハッ

としました。自分はいまだ。自分には念ずることは出来ぬのだ。だが称名なら出来る、それこの様に、と高らかに称名して感泣したことがあります。爾来往生については安らかな生活をして居ります。今茲に当時の感激を想ひ出し本願の有り難さに落涙しつつ御礼申上ます。合掌

おのづからわが行く道は定まれり
そのひとすぢを行くべかりけり
波岡氏 詠
牡丹花咲きさだまりてしすかなり
はなのしめたる位置のたしかさ
説人 不知

▽『近角先生の追憶』の稿は、先生の外遊から御帰朝までの御足跡を録して下さいました。福島先生ならではうかがひ得ない尊い記録であります。近角先生が入信、外遊、を終へられて東大の赤門前の求道会館と求道学舎において御一生の御活動下さる基盤がかくて成就せられたことを憶ひ、その御慈育の恩を深く知らされました。福島先生の御住所は東京都調布市仙川町七九四番地であります。
▽『仏教生活の告白』に就いて、皆々様の質問と所感を直接に、戸畑市中原、九工大官舎の先生に御出し下さいますやう。先生もそれを非常に欲んで

下さいます。「……広島の説者の方から所感を頂いて感激して居ります……」と御通信を頂いて居ります。不安と安心をこへた大安心、苦と喜をこえた大慶喜心、大寂静の妙味をお頒ち下さいました。

▽太子と聖人の稿は、太子の忌日をむかへ、特に感銘申すことと共を誌しました。かつて北陸の旅で、或人が、聖人の三帖の御和讃に、勢至菩薩の和讃があるのに、観音讃は何故無いのでせうとたづねられたことがあります。が、十一首の太子讃こそそのまま観音讃であります。斯くまでに太子を観仰遊される聖人を、御裏方、恵信尼公が御心の奥深く、観音の示現と尊まれたことは、おゆかしい限りであります。

定価 一部 十七四(送共)
半年 百四(送共)
一年 二百四(送共)

名古屋市南区駄上町二ノ二八
編集・発行人 花田 正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷 人 奥川 正生
名古屋市南区駄上町二ノ二八

発行所 慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番